

家族と茶道

山梨学院高等学校二年（山梨県）

丹澤 日南子

「うちそうさまでした。」

その言葉を合図に、私は茶筌を手取る。家族にお茶を振る舞うためだ。釜や茶道の道具が家に揃っているわけではないから、お点前をすることはできないけれど、高校時代茶道部だった母が大切に保管していたお茶碗と茶筌を借りて、丁寧にお茶を点てていく。もう何十年も前に使っていた茶筌は先の方が丸まっていて、泡を立てづらいというのが正直なところだ。最近母が買ってくれた新しい茶筌もある。それでも私は、母が使っていた茶筌を使ってお茶を点てるのが好きだ。どうしてと聞かれても言葉には表せないが、なぜか手に馴染むのは母の茶筌である。甘い物好きの家族と共にデザートを食べながらお茶を飲み、今日あったことを話すゆったりと流れるその時間が、私の日々の楽しみになっている。

私が茶道を始めたのは、高校に入学してからだ。母が茶

道部だったという話を聞いて、なんとなく入部した。初めは水屋に並ぶ道具の多さに圧倒されて、お稽古の準備をするのに手一杯だった。割り稽古が始まり、先生や先輩方が丁寧に教えてくださるのに、変に体が入ってしまったって、手をスムーズに動かすことができない。なかなかうまくいかず、悔しくなった私は、家でもお稽古をするようになった。学校から帛紗だけ持ち帰り、あとは家にあるものをもっとか代用してお稽古した。釜はボウル、柄杓はおたま、棗はコップ、茶杓はスプーン…。

そんな風にお稽古する私を不思議に思った家族が、茶道に興味を持つようになってくれた。ある日の夕食の後、いつものように家族でデザートを食べっていると、父が言った。

「日南子が点てたお茶、飲んでみたいなあ。」

父のその一言がきっかけで、私は家族にお茶を振る舞うようになった。初めはお茶の粉とお湯の分量の調節が難しく、お茶を点てる手つきもぎこちないので、当然おいしいお茶には仕上がらなかつた。家族に味が薄いと言われたり、渋い顔をされたりするのもしょっちゅうだった。そこで元茶道部だった母に手の動かし方のコツを教わったり、お茶の粉とお湯の絶妙なバランスを一緒に研究したりして、最近では家族一人ひとりの好みに合わせておいしいと言ってもらえるお茶が点てられるようになった。

お茶を通じた我が家の団欒の時間。茶道が家族とのコ

コミュニケーションの幅を広げるきっかけになってくれた。家族を想ってお茶を点て、家族との会話を楽しみながらそのお茶を飲む。私が茶道を始めなければ無かった時間だ。特に母とは、高校時代の話を聞きながら、当時の母も今の私と同じ様に茶道を楽しんでいたことが分かって、なんだか心が温かくなるような気がした。それが、新しいものよりも、母の使っていた茶筥の方を使いたくなる理由なのかもしれない。

「茶道」と聞くと、格式が高いもの、難しいものというイメージを持つ人が多いかも知れない。私も始める前はそう思っていた。しかし、茶道において大切なのは、お茶を通して時間を共にする相手との、心のコミュニケーションなのではないかと、私は考えるようになった。茶道を難しくとらえる必要はない。ただただ、お茶を通して相手を思いやる。心の交流を楽しむ。それは特別な場を用意しなくても、何気ない日常の中でできることなのだと思いついた。

心と心の架け橋となる茶道を、これからも大切に嗜んでいきたいと思う。